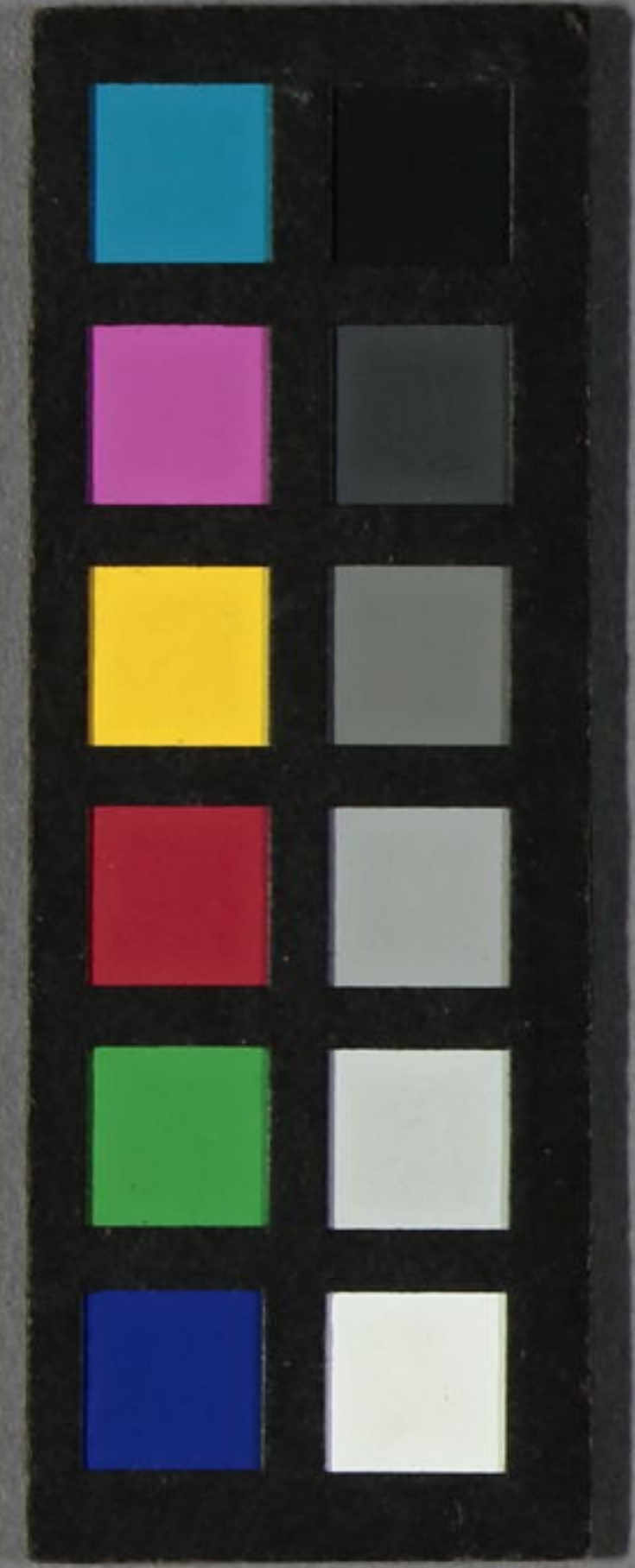


頌題齋句集 春





多しの菴の雨をうらみ 待ひ来ふ人の垣根よ
 けふ秋草は危哉い時をとおねたまわくときと
 たづひ時の月を夜ふらぬ庭になくぬれ露を
 られ哉い雪がらまを空に古き發句哉引事
 おとへけきは客かきくし興ある事なり阿それ
 四季にわたり秋暈圓つ松の正月の毎くさる佛如
 煤掃のゆきおろきくし 清く阿らとある發句を
 此係とゆきまゝくして昔の詩人にさる勢起り

今我いそぐる覺へある海に我つる乳を句さく
海へへかゝ梨出た歌をあのそとさうと歌く
あつあつ置るおあつあつ月机の下にひ先草哉
は比ま林何うゝ乳系男志見く季より臨へ
得分とせんとしりおあつあつあつおあつあつ
金持りあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
はさう哉起ひととさくに名句秀逸を撰ぶり
阿の次をこせりりり及言も撰ぶりあつあつあつ

識り恐れあ梨といへと俗に商人志見り何れ
アの先何んひとさくおあつあつあつあつあつ
さのやあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
名付くあつあつあつあつあつあつあつあつあつ
十二月都者东山園崎の星又外庵の意れ
雪あつあつあつあつあつあつあつあつあつあつ

凡例

は集題の他例を考へ證句を志らんをたれど
古くは句を考へに裁寸中とて古人よる句の或る
あるも歌の公たぐあうされ裁寸今のこれ句を
その歌此句の思ふべきを裁寸は
四季の題は事查いよく志れ家御筆を裁寸は

歌ひ裁寸やうくちを増出并新く式古今抄
朽々春拾遺可くかを輪糸幼墨等の原云まを裁
考く題の取捨を考へ

四季の歌此中附句の用りて昔句の歌かきる
多く是裁取捨又四方指ふ馬節今の歌
事の人此言ふまを考へ花燈夕寒食の歌此
其國の所法まを考へ文書昆沙門功德經のたふ
起り有るは今裁寸より裁寸を考へ事考へ

その姿情茂きり公載せり

四季の歌に中詠社の神良法寺の法華の歌あり
悉く詮句哉奉りたいて多形ありて遠交國の
事外に其名換と志きしを載せたる系ゆありて
またありて紫見及びひく歌兼種御依鞍馬の歌代
等他國少くも二月のひ筑摩宮等の古く
字及ひく歌一二名に何哉奉りて其れ余も
何れ志りし也

四季の歌乃中生歌植物の類あり古今に其れ
發句なり其類を載せりて其れ句と志りたる
後の人志るときあらん事とす

四季の歌の各目其事又ハ漢名字義をたき
まて詠諧のあり用ひ事ハ俗談子語よりひて
教入山吹と云われ出たれり哉利也

四季の歌に外に神祇釋教悉く事述懐懐齋
羈旅名所等其類句哉あり先く其の神と

好く耐録す

此者の次や成つたぬ事半句の好悪より次
此の此者の時代とかく書くべくにありき
同時此人を混して志録す

類題發句集春部

正月

蝶夢編

元日

元朝や非代の事も抄ハ歌
事も木も目出度き事とけき事
然久事人も先つり今朝の春
元日や何よたふん然わす事
えりかに田この日こそあられ
元日や家より譲りの太刀帯ん
元日や晴く春を物うす祭

伊勢 守武
赤 貞徳
競服 宗因
江戸 忠知
伊賀 芭蕉
京 玄来
江戸 嵐雪

花の春

立春

初日

初詣

初鳥

花の春 遠く子ぬき 荻花 荻花
 けりて 女も 女も 女も 女も 花の春
 雲の 雲の 雲の 雲の 雲の 根
 はる 山や 拾い 拾い 雲に 雲に
 春を 春を 九日の 九日の 花山うれ
 ぬれ 花や 大土 大土 雲の 雲の日
 梅の 香の 初より 初より 初の日
 川に 初詣 初詣 初詣 初詣 旅の 旅の
 河の 河の 初鳥 初鳥 初鳥 初鳥 春
 初鳥 初鳥 初鳥 初鳥 初鳥 初鳥

江戸 専吟
 去来
 近江 許六
 野坡
 色蕉
 任行
 支考
 野坡
 野坡
 馬明
 春入

初爰

祇園初爰

舞臺初爰

元方棚

門の雲

初爰 初爰 初爰 初爰 初爰 初爰
 祇園 祇園 祇園 祇園 祇園 祇園
 舞臺 舞臺 舞臺 舞臺 舞臺 舞臺
 元方 元方 元方 元方 元方 元方
 門の 門の 門の 門の 門の 門の
 雲 雲 雲 雲 雲 雲

季吟
 安室
 石川
 一峰
 冬道
 野坡
 松茸
 松茸

のの竹 其角
 嵩采 嵐南
 標 順也
 かきり繩 立圃
 可全
 移休
 眠魚
 玄梅
 武仙
 野坡

大姉 乙由
 兼葵 古山
 嵩固 防川
 流餅 自悦
 扇種 如行
 北枝
 巴雀
 荷子
 立志

大箸 肥前 大箸 肥前 大箸 肥前 大箸 肥前 大箸 肥前
 太鼓 加賀 太鼓 加賀 太鼓 加賀 太鼓 加賀 太鼓 加賀
 蓬菜 山店 蓬菜 山店 蓬菜 山店 蓬菜 山店 蓬菜 山店
 喰積 山店 喰積 山店 喰積 山店 喰積 山店 喰積 山店
 掛鯛 山店 掛鯛 山店 掛鯛 山店 掛鯛 山店 掛鯛 山店
 野を 山店 野を 山店 野を 山店 野を 山店 野を 山店
 加栗 山店 加栗 山店 加栗 山店 加栗 山店 加栗 山店
 串掬 山店 串掬 山店 串掬 山店 串掬 山店 串掬 山店
 後俵 山店 後俵 山店 後俵 山店 後俵 山店 後俵 山店

橙 肥前 橙 肥前 橙 肥前 橙 肥前 橙 肥前
 一者 山店 一者 山店 一者 山店 一者 山店 一者 山店
 数の子 山店 数の子 山店 数の子 山店 数の子 山店 数の子 山店
 庭竈 山店 庭竈 山店 庭竈 山店 庭竈 山店 庭竈 山店
 福菜 山店 福菜 山店 福菜 山店 福菜 山店 福菜 山店
 初曆 山店 初曆 山店 初曆 山店 初曆 山店 初曆 山店
 善始 山店 善始 山店 善始 山店 善始 山店 善始 山店

肥前 文鏡
山店 千翎
山店 芭蕉
山店 其角
山店 千代
山店 乙由
山店 宗雨
山店 宗鑑
山店 芭蕉

馬宗始
弓矢先
松葉始
总衣始
松葉子
楓始

書を先初柳抄の座の十文字
糸初より下はあさるわいの妻
袋のくちも目録しりはけめ
毎く老小老より雪の結り危
总衣始志の歌をも初り先
母方老後先つりや若志始
福葉の巻ありとくし总衣始
と交はの彼の歌や松もや
高柳や大おれあきとくし
とれもれ葉の仕入を楓葉先

江戸 湯川
近江 本尊
尾張 留扇
尾張 且葉
江戸 玄旨
伊勢 山蜂
桑 春波
南 今徳
江戸 魯中
江戸 友之
春八

高始
柳正
柳初
免用
湯葉始
蒸餅
至玉

初布や雪子備ふくし蒸葉船
と川市や蒸葉と湯葉とくし河
くし色の公さく先や柳書し
すれを先や解め氷を引起し
ほちのとれ実へを脱へ蒸ひま
家子花より引出初せん蒸葉始
月雪を蒸く先は後人初湯葉
初餅より湯葉のそりあふり危
蒸餅や晴葉のきて搦まあ
くし玉り柳打る小節の舞う乳

伊勢 嵐園
江戸 温故
江戸 琴風
伊勢 雲木
桑 立圃
出雲 琴風
尾張 和男
尾張 和水
桑 巴静
桑 言水

万歳

太忍遊

鳥追

春駒

猿引

初葦若

毬お

か〜玉の葉もあけり〜と歌の里
為果や菊も〜ふも欲お中
連てま〜子も菊を〜り万歳系
系歳やたお〜りむた〜松陰
許〜お〜入〜お〜〜中福の井
鳥追や〜鳴〜り初葦若川花川
春駒あ〜りや〜郊の町〜も小春系
猿樂〜り入〜りお〜もや〜ら〜也
い〜も〜歳〜川系も〜長果〜太鼓の若
虫〜生〜とあ〜へ〜く〜丸〜れ〜毬おが

江戸 宗陽

系 松蓋

尾 一井

山 去来

山 飛明

山 櫻不知

但馬 柳飛

系 巴靜

系 秋月

迎 狸遊

春九

ゆりく

手毬

羽子板

やゆ子

破魔弓

寶引

い鉢つぎ

ゆりくやあ〜る〜品乳の枕小巻
振袖と〜行〜ふ〜に〜奉〜て〜手〜鞠〜う〜れ
と〜こ〜物〜わ〜た〜子〜目〜出〜な〜る〜替〜え
あ〜り〜ゆ〜り〜や〜ゆ〜り〜あ〜る〜ゆ〜れ〜り
や〜り〜と〜こ〜物〜あ〜こ〜め〜子〜交〜る〜多〜女〜房
と〜ゆ〜り〜や〜乳〜母〜の〜手〜毬〜を〜二〜人〜張
寶引〜り〜蛇〜牛〜の〜角〜成〜た〜く〜く
宝引〜り〜夜〜を〜床〜の〜敷〜の〜獲〜り〜乳
寶引〜り〜わ〜か〜て〜あ〜る〜い〜ぬ〜巴〜との
編〜つ〜あ〜ら〜あ〜る〜方〜の〜方〜へ〜枕〜を〜ん

系 童書

但馬 孤舟

江戸 嵐雲

江戸 利牛

伊豆 木尊

伊豆 松舎

近江 其角

近江 李由

加賀 雨香

伊豆 朝竹

清降
 年男
 水祝
 子花白
 小松引
 若菜

ちきりや十日の雨乃降ち免
 松の下葎千代々取く男
 吹く男子秋樂と吹ひりり
 板の乃に舞ひらまより水祝
 吹く女房扮き水祝
 一生のこい保やあ祝ひ
 ちきり春も能高きん初花白
 喰へもせぬおとり出づ子の白
 己々日無植く旅して小松引
 長翫よき小無賣く若菜が

宗 晩山
 重軌
 舟泉
 春澄
 其角
 権美 祇川
 衣未
 也有
 白尼
 也蕉

春十

一と色より一交摘く若菜が
 七色子若菜つと出れ若菜が
 若菜若菜甘く了初花畑く乳
 常と畑く出あふ初花菜が
 摘拵く踏針うく初花菜が
 行方乃か踏とこく初花菜の尻
 破く手て若菜つと出れ若菜が
 若菜若菜若菜若菜若菜若菜
 情おしく摘も凡れ若菜若菜
 ぬれ搦や若菜若菜若菜若菜

尾張 女芳
 越中 楚水
 尾張 娘化
 尾張 踏連
 加賀 惟花
 江戸 万子
 尾張 秋風
 尾張 柳水
 尾張 嵐雪

蘇雜

まきくくと重けてまきあ葉黄
ゆり花くく水より七葉のうら
北のふさあく北野まきあれ
名葉つむ指の太さあく男
志め叶まきしほそ負へ言のあか
七種やゆめより舞の秋の
とらりるる歌は白へ分蘇れ
鶯よりひのくらすきそは蘇れ
今のくそ兒の蘇老たふや
七葉や唱哥ゆくは口の巾

新波 末山
加賀 乙由
尾張 希因
上野 其考
伊賀 一音
其考
伊賀 猿維
系 我美
北枝

蘇粥
福浦
初宿系
本芽溪
春下

あしき酒さち白くあか
七くさや次子またく名は骨
まれ板よきむし蘇老まき
それとにたけけあれのみ水
水鶏ともまひひの巻の蘇れ
まき取く形あさくあや蘇れ
ゆりしむし蘇れ水の水の月
と川黄の江岸てまのれ蘇れ寺
蓋りして去まの考もあつ木芽溪
花咲て岩と尾との春あし

景道
松隈
此翁
其考
舟休
見示
圓入
貞位
其南

具足後用
大義長

綱引

小豆粥統ふ

粥はしら

粥杖

節振舞

雲の内

嘗て我志地くく水と春かじ

伊勢湯老の鏡ひよ木や具足捷

ひの山やたしとまを老義長

老義長や横電あてぬより

綱ひよや巻子師一宗神の巻

正月後のちうにぬ粥とら

かぢはえよ迎ふりてうらみり

於此高や引物役や如田の巻

去取く常の節日は年より

系

風園

許六

系

季吟

系

我臨

系

龜遊

近

冬抱

系

三鼓

近

孟遠

江

不角

春十二

廿日正月
御忌

木地の娘嫁

敷入

妻おた者と来きり松老内

正月の廿日よりあまの敷入

松崎崎身ゆきへく水忌の鏡

ちうけぬ捷の昔や御忌の子

梅まき木地の娘嫁の白う乳

巻又入や牛合点して大系近

やか入やちうたふく弥母り

敷入や灸まきまの親あま

巻入の巻夜たのく文はり

巻又入りまの巻く火焼

近

秋石

系

其談

陰

素心

近

其角

近

里東

近

冷天

近

咫尺

近

連之

福寿草

木の芽

春の八つ母へ二日の宮はえ
春又八つ母へ多子以摘取
福寿草事々に同出發根さ
福寿草けき咲物と指へり
能中やいほの又さる木の芽
そやさしく咲ぬ梢も木の芽
兼虫の息受て居る木の芽
春は木の芽かきうも木の芽
木の芽芽とさるる木の芽
修り木の芽候也る木の芽

伊豆 我羊
未 素流
近 吹風
近 文素
鹿 露沾
尾 露川
京 素流
伊 凡北
近 雪芝
近 雪芝

下崩

莖立
若草

下崩や及あそも中崩さる
下崩や及あそも中崩さる
下崩や及あそも中崩さる
下崩や及あそも中崩さる
下崩や及あそも中崩さる
下崩や及あそも中崩さる
下崩や及あそも中崩さる
下崩や及あそも中崩さる
下崩や及あそも中崩さる
下崩や及あそも中崩さる

越中 二川
越後 北濱
伊豆 菅泊
伊豆 松舟
南都 此筋
尾 鬼市
伊豆 已百
伊豆 風眩
伊豆 杜菱
温故

夜子名紫
梅

口々字のへはくは来りりり
敬との数ちり山奈子のあまきり
梅のまりののり日の出山海は
山望あ萬軍進一越火の花
なりの枝枝のさけあや梅の花
梅の花先よ呼よきてあひれ
行枝り脈わかよひく雲の花
望よ咲横りつ海越や梅の花
愛にに口きうせり梅の花
瘦とて吾にきく雲れ皆ひど

我中 沙文
かか 倚翠
芭蕉
其角
来山
支考
尚白
洛通
去来

同子まろく正月とや一雲の花
梅の島や火焼と去のまきうは
立ちあゆ木と古ひり梅の花
雲と小首ひ移る如雲花を
雲一見一編侍水のあまきり
む先咲や川の野分れ枝の葉
とれくるり咲梅と梅の花
枝あつは獲針てやむ先咲れ
雲の志の月あつおとや去
暮とて美人花心や先花を

猿維
源亮
金羅
佩外
嵐雲
地坡
云芳
惟花
桃咲

のみち海とのひて教さけ梅のそ
 来於るの心乃備や梅のそ
 梅のそ梅のそ梅のそ梅のそ
 起先やか今里あるしの角
 梅のそ梅のそ梅のそ梅のそ
 久しとて障子わらう梅の花
 何ぞ我ま川を横り梅の花
 寒苦しとやまけは笑や梅の花
 十八町舞より里の梅の花
 梅のそ梅のそ梅のそ梅のそ

岩川
 信長
 曾良
 裁人
 加賀
 勺空
 位古
 桃化
 曾九
 乙由
 柳居
 春十五

柳

河之く流覚懐とありや梅のそ
 梅のそ梅のそ梅のそ梅のそ
 梅のそ梅のそ梅のそ梅のそ
 八九石空て雨あ乾柳のそ
 傘て押分尺きり柳のそ
 風やんく懐ひりや梅のそ
 志のそ梅のそ梅のそ梅のそ
 己の本をらて志と柳のそ
 風ありに志の雨ゆり梅のそ
 志のそ梅のそ梅のそ梅のそ

嵐七
 千代
 五筑
 芭蕉
 不角
 木因
 玄来
 其角
 与考

津水より月ゆるあはれは柳の乳
侍よりく馬の乳の春の那
吹度よ蝶の居たる柳の終
柳よりほき揺りて川を奔る乳
引くもさく放かひさる春の
人あとの中へ春の乳を船に
舟へ入りて日のあたる柳の
木兔の眠りあくるや春の那
懐子より月のあはれを柳の
川とへ流るや乳を春の乳哉

津水 由乎
侍 心
吹度 一笑
柳より 尾法
引くも 文字
人あとの 浪化
舟へ入りて 船坡
木兔の 吟風
懐子より 素就
川とへ流る 此節

春十六

風のゆく春の乳しるの春の乳
おきのささゆき風の柳の乳
又もくちをわたる春の柳の乳
保の柳や春の乳の春の柳の乳
川水よりたへは流る春の柳の乳
春の直より雨の春の柳の乳
一本の春の柳より春の柳の乳
花さのあはれを春の柳の乳
柳て春の乳の春の柳の乳
春の春の乳の春の柳の乳

津水 柳水
おきの 牧事
又もくち 小春
保の柳や 江戶
川水より 三河
春の直より 松後
一本の春の 系
花さのあはれ 助豊
柳て春の乳 尾法
春の春の乳 乙由
柳の乳 木兒
柳の乳 柳君

嫁ぐも死

青柳や花きく木より扇し死
枯れ長くまへく遠く春の乳
さんゆりと水より流る柳より
何と好く二月よ来し春の形
青柳やお交はる春の色
凍解りては風も吹や落のそ
柳より乃多山の乾きも落の蒙
その白ひ紙燭燈てもぬまれ蒙
く紙巾にちれきるれ嫁菜は
二葉より春のやよめりて死

扇周 風之 文素 乙兒 秋瓜 朱堂 新坡 瓶休 一宇

落の蒙

當菜

種子出く小徳やゆい當菜
くくは菜葉お煮のそひるか
おひらりと見る京の水菜は乳

東流 馬六 尚云

水入菜

芥

我事と鏡の面一根芥は
手より風をききとあしぬ田芥は
芥はとや起るへは返り語の如
若菜おより秋の葉の根芥は

文章 奉白 十丈 乙語

角くむ芦

川流や淡哉やまむ芦の角
まこむへ海のやうむ芦の角

猿鉦 三惟

松の若緑

のひくとしうほぬ松の若くは
結く道の小松や若くは
思深こは松のそとわお緑
候をわかすう松若くは
うひまもさぬまをさへ松の若
夕風や松の花ちる若くは
あやうん松葉はあはく大根
味あ松の若れ白ひわはく大根
彼らうくまきや水のほりま
ほりまは松若くは母の若くは

松の花
千大根
海苔

京 滴水
涼菘
去芳
條愛
伊賀 鹿元
冬菘
京 信位
後河 菜旦
北酒
春流

龍菜

春のうき末あさやをせ袋
龍菜ふくはあ松のちしうと
山椒のわく皮ちうくは世は
川水や何りまは海苔の味
若くは吹なうは松の若くは
のう取わかすくは波を立論り
若くは松の若くは松の若くは
うひまもさぬまをさへ松の若
うひまもさぬまをさへ松の若

山椒皮
海苔

鶯

京 蓮中
京 若菜
江戸 其角
下総 菜旦
老後 菘石
京 一軒
松付 負室
老後 菘菜
色蕉

うらまのや餌も養まはる様のせん
 黄もや汁も枯紫と踏み
 うらまの牙と近うおそろふ
 字久龍もや葉の木畑も然る夜
 鳥や約のも啼て聞ゆる
 うらまのやせしとせぬわし
 黄もや根も走るる世の中
 鶯や雀もわく聲も哀
 うらまのやせしと息も朝も
 常もつとせし下りふ物の流

色葉 荷子 七角 大草 玄米 文考 木固 神坂 山臺 北枝

春九

鶯も雀も啼て鳥もくまの
 常のひらいてせし木も
 黄もや一葉も念我入より
 鳥もつとせし下りふ物の流
 うらまのやせしと息も朝も
 常もつとせし下りふ物の流
 黄もや根も走るる世の中
 うらまのやせしと息も朝も
 常もつとせし下りふ物の流

如行 斜炭 利牛 伊物 十丈 反朱 浪化 林也

百千鳥

雲巾かき出せ出へ越て川
くまの鳥のふらりも捨て初音
黄鳥やあそびしと夢の古り
百千鳥越えお春日如く
川と春鳥の梅を百ちや
鶯花を春の初を春の定
暖やさえつる春水うらも
ふ魚やあへう好る身と似の海
さく突の餌り年物とあつ他
白魚や石まきくは消ぬへ

雲巾

初音

古り

如く

其角

春水

女泉

猿鉦

貞隆

担風

春二十

水鳥

白魚

千鶴

輪 魚水 鵜 春風

ふ魚あ計くつひる船うら
白魚の志ろま白ひや枚の箋
ふ急り價あつるさうそり
舟く鶴の志ろま春日乾
一升あかま海より飲くら
舟も細まきくつ知や観くら
給や山へかきはく海の色
魚あそび破る春の水の非
鵜のまつらえくまの飯田の鳥
春風や麦の中川の水の音

角長

初音

白雲

其角

里亮

孤松

跨山

芭蕉

水導

雪解

春風や三保の松系法入寺
灸の点二ぬるも度は春の風
旋子の尾は春風ゆく日影は
とらふをやぬの裾より松の音
唄をぬ旅人あはれも春風凡
春かきや布よ水まきく小石系
かきつひのそをぬあや春の風
雪が春ちぢれもやは春の風
春風より山と粟の枯葉は
雪解や於へ出く下駄の足

免責 許六 尚本 潘川 兼太 既白 春渚 康工 煤炭 治徳

雪汁 雪乃 残雪

雪解や軒の割木のま川一取
かきま川く炭取くま雪解は
雪とけてけ申川越り来り乳
雪にぬわると乳あしと乳系系
雪汁や喰いしん切か春す
候く下塔の雪乃れ雪乃乳
枚起て畑残えさる雪乃乳
雪の雪は雪の雪へ雪の雪
の雪雪は雪の雪く雪りり
雪の雪の雪く雪雪雪雪

水魚 青雨 曉春 乳母 木心 乙妙 冬角 涼若 正秀 虚志

春雪

春も薄し雪よまろく即ち
是まろくしとして春も雪
春の雪雨かまよえぬ
下筋の糸色さしきや春の雪
くはひもや梅の枝と下筋の
けし板の筋まろけり春の雪
侯雪や一つまろく春の雪
傘も雨まろく候や春の雪
凍糸やまろくまろく梅の
雪まろく候と毎の氷の氷

凍糸

或後 雪海
一笑
李由
伊賀 冬日
若伴
尾張 氣弾
已静
去芳
小枝
春廿二

水ぬらむ

凍とゆやまのあまのゆく
終子帯てひの入り氷の氷
まろくも氷はふる川に那
舟はやめろく候や春の雪
残糸の小唄も出や水ぬらむ
ぬらむ水はやま候も春の雪
及びおろく候と水ぬらむ
ぬらむと氷の枯木も春の雪
春の雪もあまの川も春の雪
春の雪もあまの川も春の雪

夜

魏岐 一海
仙行
篠爰
乙筑
伊賀 雪賤
丹後 阿比
天竺 文水
放風
芭蕉
言水

清庭

幸望の麦や菜種や朝の
ま川にて時々まひくたか
紫糸の立枝もろや和庭
仲有帆の拵もや夕か
あもあふふと暮るる
海波の立かろてや
帆残らる轆轤の七
葉もろの穴挿し宵の
夕暮も岩我を後
おとし介名清と

老境 荷分 希同 名醉 又 後川 及布 坐泉 子風 蝶爰

長閑

の吹くさや海か
長閑さやまの
くぞくや田の
ららやあ如布
長閑さや美
あそくあ
暖りもくけ

木節 杜園 利牛 一有 碩庵 茶老 雨竹 雉園 秋風

暖

倭寒

くまの走の行つりきりきり
撞りまきこてぬれぬ改申
彼屋あきききき一夜おこ
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
咳くげく物もぬるる解き
宵戸中冬頃えりりり田塚
はえりりりりりりりりりり
佐保准やゆりゆりの西いりり

冴加へる
佐保准

二月

春九四

文考
仙化

乙由
孤直

文考
乙由

文考
泥足

文考
嵐陣

二日矣

ききき地や身も替り子と押突
親の悪言いぬ二日矣りり
きりりりりりりりりりり
初午や下向と碎る長老顔
はつちや志も物も赤の飯
きりりりりりりりりりり
初半よあきあきく蝶の袂り
釋奠や改むらまらその日
地りりりりりりりりりり
傍協の顔と宵りりりりりり

辺り
千那

伊勢
免士

北坡

吾仲

山只

也育

其角

宗子

治徳

謀爰

釋奠

薪の能

二月老修法

張載抱松明

涅槃會

水よりやきりし佛の指方なき
吾けり菩提の水をためて
松明や語れ木のりなき
雲のいりて風のふちり
歎息を不説あり神文像
涅槃言や彼を合する珠殺の言
孫子ありておれなき涅槃言
おれなきありし佛も涅槃言
乙入も後敵をわく神文像
木仏も神像をわく涅槃言

春廿五

芭蕉

玄梅

方山

神明

季冷

芭蕉

孫子

孤舟

己百

許六

涅槃言や片肌を漢力外

神文像より其親の立佛

有る候りて涅槃言

涅槃言やそれより未だ日の光

大佛も横をみるに中入穢

者信り死きしあり神文像

手枕の樂いありて涅槃言

涅槃言はけり二月神文像

神文像は力とて死てはなき

涅槃言は力とて死てはなき

謝松

左次

寸く

言水

不至

乙由

木火

至川

入楚

止弦

霜葉落御法

貝弄風

彼岸

念佛證
治聲酒
獲月

妙く川の流のせしめぬ水は流る
貝ももたれちりあつてさうも獲貝
極さくさうもは強虎の彼岸ぞ
何れかえさく彼岸の入りたなり
と念の法辨ししる彼岸れ
うさうさる花を毎しひんが
うれへし念佛誦老松抄あり
治聲酒やま川の中初てま
海しく水橋のあつたぬら月
流舟のさう引る杉舟の山

秋鳥
車扇
支考
念黄
吾仲
丹後 季友
嵐宮
信法 友松
赤 志水
古根

梅の恋や玉肘 雲老獲月
夕風より何吹とく若らばま
指進さく梅の葉より獲月
水風鳥よ夏る獲月和れ
秋たれまぬ夜もあつた獲月
葉のあつた世さく秋の月
雲うの入りさうてや腰つま
青雲も梅も出さぬおてん
海棠の花をみちる獲月
何れかえさく白く獲月

芭蕉
水枝
言水
支考
志未
高川
、
将花
江戸 外我
如雲

鶯を思ふも志まはば
梅の夜や蝶の標本の
何れへひり水きき
公の素素は梅や
梅の影さきと梅
登入ると花は代
忘るるより志は
帆柱のほろり
六条の波と境
ちり夜の言

春
徐
希
范
春
梅
唐
可
政
秋

出代

夕の水は海に水きき
登るれは思ふた
出がらや昔れ
残屑や出の
おらりの名
出がらや猫
おらりに
出代
おらりの
出がらや

三河
采林
嵐
非
李
山
木
許
朱

陽炎

出かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る

永友元
伊勢 龜形
若木
乙虫
か賀 采女
伊勢 浮風
和歌 吳一
伊勢 二曲
芭蕉

春九八

かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る
かきうやゆめは借るまから借る

乙虫
採風
乙虫
天岳
立志
乱糸
傘下

鳥文
 鳥の巢
 朝鷹
 残尾鷹
 仰り枝
 仰り山
 鳥の枝

かげろふわ川の流るる蛇うく
 可あろふま去の白ひや車道
 湯美や横し海しう酒の桶
 加希海ふや下おほく所お中
 鷹化して花の代あり蛇の巻
 朝鷹や出ると戻ると小くうり
 とやゆきの尾はけけける白尾が
 月けへく星と枝折や仰り枝
 おろふ川お月ま先つ仰り山
 言消く大音あく数小そるれ

流字
 播山
 系 啞瓜
 同防 枝系
 其友
 貞位
 飛水
 江戸 鶏口
 先お 巖籠
 枕傍

春廿九

鳥文
 鳥の巢
 籠子

けりやさつふあうふ候まきと
 つりだふ鳥や鷹たも鳥の枝
 鳥とさうふ鳥や在る一造化
 春風より葉まふぬまむ花うれ
 糸柳葉より引く刀るす先が
 鳥の巢や葉一節の蛇う葉
 籠くふと吐き思ふ籠子の巻
 何中のおいたりさそ籠子の巻
 替ひ子とつらむら蛇の声

蕉立
 系後
 思鳥
 山 為有
 其徳 可吟
 下井 春雨
 江戸 半月
 芭蕉
 涼菖
 千那

遠きもひけと旅子の海より
ふりかた敷く旅子の旅より
春の伴も何はうと旅子の
名も物も書ふ旅子の
静も心も旅子の
山の幅啼ひけと旅子の
岩角よりけと旅子の
春も花もたつと旅子の
何れも旅子の
旅より旅より

玄来 其角 入山 龍坡 荻人 龍明 岩虎 巴靜

春三十

燕

秋もけは燕くけと旅子の
かまはと事も何れと旅子の
旅も衣も旅より旅の
啼の形も静さと旅子の
旅も事もたつと旅子の
何れも旅より旅の
旅より旅より
旅も旅も旅も
旅も旅も旅も

淇園 千代 周外 初冬 困更 桐雨 涼菟 芭蕉 方丸 玄来

櫻や子成昔小春の侍は
乙名何田と成りてはまの
か女中化粧の中や鬼つと先
燕や世より来りて長き目も
山の垣につも先とかく入る
榮花中や鬼つと先つと先
炎留りたて世に成りて乙名
乙名や榮の中を何と私結
月夜りあつて何と燦々
玄名何何成りて中かく

山姥 金糸
神寺
木導
楓并
左角
峯流
氣輝
小春
乙中

春世一

白鳥
箱島
野雁

世の中は横をちる女燦々
かひとのよりのあつては燕
市路日冬表りて何と乙名
暁やかつては燕の歌を
果空や何と多しり何と山
鬼てまゝに何と入る何と
子代や何と何と何と何と
麦喰一丁と何と何と何と
ゆりくると何と何と何と何と
帰る何と何と何と何と

乙兒
和中
可枝
曾衣
怪花
雨結
野水
涼菖
文章

かく歌をそあつまるるるはのさき
 帰る厚采つまをたつやあふ
 夜通しに何れ油丁のいそがし
 立きく今や紀の厚伊勢の丁
 たく立ちり麦の中よりかへる厚
 何事とて田探まりくくうさか
 吹礼とくあ交りし厚厚が
 きろくくも移んく考るかへる丁
 友喊く啼きあふあゆむか
 伴とく名あそく一々立増く

公来 之角 浪化 伊勢 厚雄 天原 荊口 子英 岩電 朱松 田中 恩蒙 岩中 岩書

春世二

雲雀

来るるりも目如をあやゆる厚
 京中や物も針久きり
 長を日試つたつたあ雀が
 啼くくも風は流くひさる
 夕を花日敷追へく入より
 風を安よあつて月を雲雀
 来雲とあくかきくあ雀が
 来るも又侍子くく日そあひさ
 三日月と踏へくあ雀が
 枚の木はを祝よとく雲雀が

未元 諸九 芭蕉 岩電 之石 飛登 恒登 如象 三ノ風 氷花

響

子やまゝにわらひて花のさき
春風より力くく人云花の乳
馬を拍ひつゝおのてこら
日中のまゝに長つゝひらり
作向り度く見え那のひらり
夕むもて翌の日和れんも
作向も下りてななく雲程か
氣をよへたはるは直ぐひらり
中つゝの夜よへる乳や花の乳
花の香もよも響の終り

山只 千代 紀六 杜原 乙南 除風 謙山 李中 地水 秋乳

駒

花の子

蝶

駒を此花あひひり 岩老上
春をよいさむわ駒の終り
花子と春啼かすは氣あ
人の秋乃鳥追ひり花の子
まゝ花や姉よりひら歌に桂
蝶煙くはるは花あひひり
起るく我友よ老人ぬら
春をよいさむ 蝶のこころ
酒くま人よかすは蝶の乳
ぬふかくは母織るはの胡蝶

乙羽 丸雲 嵐奈 芭蕉 湖春 櫻市 翁黄 芭蕉 沙乃 乙の

くらがへく夏のぬくふ胡蝶こ
 吹まらてき翅をうつくは蝶う
 ら川うらと手切る花はあは蝶あ
 掃の子はえんつほまのこころはこ
 蝶くや死のふく日のたもきた
 思ふも禁まふまぬは蝶ま
 死に下舞のあまふまてくあ
 抱いそく花とすはは胡蝶は
 道走り落てあつふく死のてくて
 蝶くや色盗人とけくと

春世四

何の事なき心く蝶のまほはま
 蝶くや色盗人とけくと
 てくくや色盗人とけくと
 蝶くや女子の道老ははは
 蝶くや折折抱ひはは
 先にて傘の上あふ胡蝶あ
 山吹よ何れいららる蝶ら
 蜂の巣や一らくり先先
 蜂の巣や留まらそふそ
 蛇の目の何々惚らら

己筑 秋凡 鳥明 子代 琴之 巨石 魚日 巢二 杜洲 反考

経

你向うとあきてりり、や此の足
此のあ、子の破とと、
おれぬ公く、
格、
向の経、
業、
あか、
亭、
影、
きろく、

春五
嵐景
落格
李由
系世
涼菴
文章
名強
六三

和歌の、
夕、
蓬、
田、
い、
朝、
弦、
川、
牽、
室、

北枝
西吟
言水
北枝
太来
乙柳
乙由
菅本
負佐
麻文

蛙子

田螺

地虫出

徒夜の水さけりて蛙の乳
 宵闇や寝臥踏乳となく蛙
 一思案虫身て露あま蛙の那
 立よれ水よ生りてかき川が
 加る子に川を乳とあつてさ
 出川やとなくも玉蛙の子
 蛙子や何あつて志んぬ水の子
 おれとんぬけりて人かきり
 あつてま穴あふてや蛇の面
 つくと泡ゆく歌の田螺が

秋瓜 女三
 風傳 伝説
 鷲山 伝説
 葉里 伝説
 休亭 伝説
 砂陸 伝説
 珠夏
 赤山 丹後
 赤陌
 四睡
 春世六

鐘 初樹 龍 飯銷

乃舟の子踏あまのる田螺が
 京政の行目哉捨ふ田螺の乳
 ぬり立の睡をゆりて田螺の那
 あつくと穴あふてや蛇の面
 泡ゆく歌と伝説の田螺が
 ぬりと歌獄りあつて田螺が
 都人冬思木とや人ん馬刀一把
 又川樹表独活の歌籠る乳
 名銘の中に記さるるこゝ乳
 飯銷ののちやあつて果るき那

猿雄
 牛角
 十文 丹後
 如作 丹後
 山弦 伝説
 牛文 伝説
 曹北
 一連堂
 善寺 伝説
 赤山

猫の恋

飯糰魚や八道の思乃立ぬるも
猫の素毫の崩もさう通ひらり
呼切り来てぬらぬや猫の恋
猫のこ急飽の貝やかかおひ
福このへんお手うり啼て表
あ方り舞う有く猫中名ひ
うたゑりたてや猫の望くひ
うはゆりまうか猫のほりら
二三日内少くあつた福こ表恋
日南少く尾のすうぬ猫中恋

玉法 怪烈
芭蕉
本寺
和知
神坡
末山
支考
尚公
舎羅
免黄
春井七

とや免よ出るぬ猫中あかきり
猫のへん崩も有くはあまし
思きぬぬ猫の公古名おきや
うもゆりおひだり猫のへん
おろく来よ呼く猫中あ
猫の恋ほく飯を喰よりり
飛さうあつたやきし種
おの素毫と女猫のこし
兼おまの節少くぬぬ猫の恋
猫のこ急飽あへんまきり

親舟
琴風
秋毛
裁人
車番
反茶
林和
免士
嵐七
丈石
玉

藤の角

何れ日の死より藤こそ藤の角
やまうれやまよきまや藤の角
恋成せし身を悔してや藤の角
角藤より三日をのぶ男藤が
付の藤よりやまうれや藤の角
藤より藤より藤より藤の角
藤より藤より藤より藤の角
藤より藤より藤より藤の角
藤より藤より藤より藤の角
藤より藤より藤より藤の角

初雷

猿 鎌 雲江 貞備 朱杜 蕉笠 魯九 蝶爰 去来 深菴 秋坊

春井八

初梅

あももうれ初梅より梅光り
初梅の日はあして梅の赤きうれ
初梅や梅より梅より梅の赤きうれ
初梅や梅より梅より梅の赤きうれ
初梅や梅より梅より梅の赤きうれ
初梅や梅より梅より梅の赤きうれ
初梅や梅より梅より梅の赤きうれ
初梅や梅より梅より梅の赤きうれ
初梅や梅より梅より梅の赤きうれ
初梅や梅より梅より梅の赤きうれ

去来 知行 梅仙 亭子 以茶 布舟 冬抱 芭水 糸 如及 芭蕉

初梅

あももうれ初梅より梅光り

芭蕉

彼母接
糸接

先つりの春をててそ初きう
あな娘のかうはつはやう川橋
さ川橋まを過くは笑ふも
あはささこいほやけは初橋
みるお井りふはやうさうさ
人お兼もかゝ窺く初橋
たて戻るかてまをては川橋
象せ娘あはう彼母接うれ
鏡持く笑もひうん接う那
あまはさう柳の枝やいとさう

一笑
千那
伊勢 利雪
鬼黄
乙妙
沾位
代
山若草
出舟 風草
乙妙
春世九

椿

糸接 能もあつたはるれ
百筋と春のさあり糸接
面の白冬花さうは糸接
あさふりああ月より花接
と云入る冬うつふ花接うれ
鴨衣うり川であつはて
あかいうりやのさう椿うれ
あつてもあまうりや接う
あま接保しそう椿教より
あつてもあまうりや接うれ

那放
先士
芭蕉
曲翠
正秀
治蓬
院坡
文考

さし木

夏の海小橋を道よりいひ
一軒しちちや日うらの赤橋
今藤つともしも蓋方なつと
はつこく水穴のぬきたる出木
さし木も直りも折りし
乃くふり花お多し接木
梅の葉れとやあつ下つ接木
苗代を見とある森の馬乳
水飽く初め青く苗代田
苗代やうれ款もあつ蛙

利牛

公系

近江 巨海

舟泉

一笑

加賀 丸宮

芦丸

文考

許六

春四十

接木

苗代

疇ゆて

苗代や東寺の塔砂水うら
あつらわ仁王のやれ足のは
苗代すいせう水のまこと
苗代の色接はかた青く乳
苗志うや踏んとさる踏ん
苗代や旅うたにる半の糸
疇ゆらや養ゆりまき川
疇ゆ架や湖の水引とぎけ
小童まきお水はあつ乳
種下り俵うりさく小橋

追分 朱迪

丹波 丹波

子英

幽泉

上佐 素石

子羽

佐渡 荊口

文竿

武蔵 榊儿

金角

水口祭

種下り

種う
種前

種芋

畑打

種漬く湯はけり地川
種加や太非宮へ一はのこ
麻前や道は二舞の付ぬも
種まらわ磨の外より雨に
たの芋や花のさくら枝葉わ
種芋や植ぬ先うき芽又
種くもえんく畑の男乳
ゆりと秋の光りや雲の種
畑ももつれ家の藤や川白
こも打やむく志願の如人

京 辨石
上野 之角
伊勢 曉雨
武蔵 氏古
芭蕉
吟風
本末
秋之坊
乃露

春四十一

焼野

すくる為

山焼

のひ家
胡葱
葱の安

青打のは先わ小田の荒とに
山名や小松の孫家焼種は
名はり焼種を恨む風の来
とやしくは春と吹出た焼種が
雨よりや去手のまくらの子を
山焼くや孫家みり星りり
山焼や孫り入日の焼種り
猪丸を義城うく屯のひ家
あま川支那村まゆれら白乳
徳の事と一夜寐より葱の安

伊勢 煮程
伊勢 左木
其後 猿維
筑前 呼丁
水札
其後 魚目
其後 異花
伊勢 那明
伊勢 汀芦
伊勢 半残

独活

烏芋

大菟

救急

毒加

香我坊と地をこぼるる草は

尋とも古葉下の独活のえ

佳子のほろびたるは

去極如横よとへもほくし

育の雨あやも去草の長し

ほくし瓜のあふ穉うれ

年立く何く伝やつし

道くあたるも去草の

地の草もそのまじり

加し葉や草もわが

采山

独活

蕨

園指

塩車

支考

千代

治位

馬

我馬

防風

蓮柱

山葵

子かた

蕨

今にんを鼻とちりもん

唐女の根りちりも

ほろびやほろびの

極あれ指糸やま

泥龜の根りちり

と雲り追草馬の

とて八路の松や

芳しれ子や花あ

はゆりて鏡神よ

数るふり松る子

佳木

素竹

於山

支考

之角

紀東

三竹

之冲

由之

大芳

うす草
菊紫
香英
菜の花

物春の巻よりあつた殿うれ
仙人の墓に指さしして殿
子殿や笠とら山者抱り
とつて我家の梅よりあつた
瓜取や月と朝と新神海取
たんぼやまをとりまてあつた
数子や徳も一きり徳も一
せんぼやまをとりまてあつた
菜の花や花もあつた
かたむちや一本咲く松の下

元寇
正秀
兼山
志山
秋瓜
雲麻
言水
宗周

大根の花

菜の花や小をとりあつた
たんぼや菜の花もあつた
菜の花や戸口もあつた
菜の花やあつた
かたむちや棘もあつた
たんぼや小をとりあつた
菜の花や花もあつた
かたむちやあつた
菜の花や花もあつた
踏たんぼやあつた

史邦
長紅
嵐島
戲案
押后
以之
淡々
玄武
舞爰
乃毫

菊 海雲 首 案

あつちのし大根の花のさくら花
 菜のふり引のしんく種大根
 いまう系咲そふ物も免おきと
 葉も刺も公おら似ぬ淡う那
 葉の中おりたれひく出をさ
 塩毒も海の家らや海雲汁
 たおし先やをさき首の一葉つ
 いのり雨のあしるあうれ
 夕暮れおろたやや風中
 いきぬ白根嶽をいさぐ

曾北
 山味 了ん
 荒蕪
 文考
 范字
 巴靜
 草吹
 白
 丸
 梅奴

春四十四

風巾ひらきさるる小川うれ
 几中引きおあやや軍の教
 くらぬき細工さくさく風巾
 夕くれやうれ查のさぬいさる
 葛れ轉成ぬきてやさまの巾
 清おりり糸を付てやあ考
 不接燈乳死の書くいおぬ
 吹けくさむは敬外几中
 たる強りもさぬさるのほり
 糸引ても日もかきや風巾

舎死
 風園
 三の 梅先
 秋坊
 東吾
 尾法 理光
 嵐枝
 尾法 子代
 京 阿當
 用舟

三月

上巳の昔

照吹柳ゆきハ春の昔白き

一日無挑あまはさきく都くれ

曲水

曲水や筆の流る御海水

川下てまよと盃あき先きり

曲水や岩よ三つ川廻りくも

曲水より横流りく山路りれ

給りくそ神ひまきりり能の歌

能の根宮獲ははしりきり

方山

寧陀

角上

兼笠

希因

大光

角

卷四五

雛

春風より二かた雛の駕出尻

尾の子は餅とまやも雛れ

姉妹肩並流りぬし雛の駕

春風よりのみ歌雛の尻風ぶ

振舞や下座よあきる去るの雛

雛の口飯つ小針くそまきり

雛立ちく馬よたると娘の子

氣とり入る一使きり雛まつり

おつそ中よりくは雛れ

おつそ男せりく女や雛ひ、那

菽子

如行

斜嶺

風國

去来

天弓

了ん

荒洞

許紅

乙兒

草の餅

常力衣束てはあらん草の餅
摘てはふ杵をたけりて蓬餅
源氏隆の妻の形やまのりち
草餅や書しをたてて此の白ひ
草りちや先きおと付てうら
此よりうら先きおと付てうら
みまうひを先きつてお名顔つて
君代や孫に結し柳太刀
第か名物子に飾く逆毛うれ
順礼冬くはよおや第あはを

柳太刀
鷗合

嵐雪
乙由
向適
理然
馬六
七噫
但馬
乙柳
一桂
之角
春四十六

汐干

掃如もいかに著し乾やう合
衣くお海へ恨さう鷗あはを
赤みのと又佐のとく鷗合
青布のはよきうき汐干
うら帆の淡路もあれぬ御干
駕籠ありて淡路へのん汐干か
海風多松よおりて志保ひれ
三日月や汐干もよの儀よ束
をきうらうの汐干や田植腰
帯海と大川のなるき汐干うれ

白
舉
公
婆
君
室
芭
蕉
素
来
如
象
帆
竹
木
周
夙
我
沾
徳

佐の海磯取
壬生念佛
御免拭

き出うゝ無き地へ見て病るゆに
彩田はあつち中へきほひれ
みちもちよ松系きおひて
入る物のかうくとゆる瀬下り
公浪の人より追新志存ひれ
青くくと空らうへくゆて
磯より法海もきれて去後の海
雲波のりりあまうと也壬生念佛
ち花の日向もあつち壬生念佛
梅檀の香らあつちも吸裁の毛

代木
乃露
兔士
杏雨
仙李
梅川
太祇
菊二
白扇
春四七

峯入

永交日

峯入の言も子籬の旅跡れ
峰入や款七先けら 鏝衣に
永交日や子よにあひて夕馬
あつち目や仲志先木のよりのま
懺法衣と衣れあつちる日のま
永交日や清づくゆもあつち
永交日や徳とつれ川波田の楮
あつち目や抄外事とて強の皮
あつち目やたうれ次身の祝あつち
若借く及るれはよき雲のれ

宗周
古芳
道春
那水
許六
上枝
朱迪
素丸
文意
阿流

春の日

永交日や今秋の芳苑も雲の裏
春の白牡丹を忘御ゆる花野を
とらぬやも葉の未留も小法師
春の日はあけあけ出ても昔は
ゆけりぬ春をわくくと春の雨
春雨や竹の葉つゝふ春根の偏
物と八丈子の花とや春の雨
春雨やうらやまを這今石灯籠
春雨やぬきぬはの夜名の宛
春の雨や火燒き外へ足と出

下野 松路
尚ふ
正秀
加賀 見丸
玄旨
芭蕉
荊口
秋風
文章
末山
春四六

春雨

月夜の目成やは先を春の雨
けり冬あつとつらん日次りぬ
地ろくくは春へり春のあえ
春雨や春の公中ながれは
あつとつと春の春の雨
傘とけりけりけりけり春の雨
横りぬらぬ直るや春の雨
春の雨や葉も枯る春の雨
春の雨や葉も枯る春の雨
春の雨や葉も枯る春の雨

与考
そ角
一笑
友元
木蘭
向空
林外
乙由
か賀 相之
哉平 季布

別業

春雨や四葉已葉のやり木履
開帳の淵よむ日くさ萩のあめ
旋子とららぬぬあふ萩のふ
去るや笑しう物物とらら
夕飯多食て志まひらう春の雨
春をや出口へ来てははるる
一日冬内は飛とくや去るあ
去るう眠さそらや春を雨
去るいふおとそ火持と寒さる
ゆく病まういふあまのあうれ

北須 ^{加賀} 素風
杜若 ^{紀伊} 千代
松花 ^{陸奥} 丈草
謀反 ^{出羽} 惟中
調素 子那

田舎鶴成

郭公の業

若井業

鳥帰る

雲合

麦熟

呼子鳥

嘴より海と色の見ゆらうら
けり去る業う歌くや和ら
若井業と志風梢子若の如
去るいふも去るえうた去る
鳥かへ去るやそ若と如う
鳥雲より餌さ一人のいふ
そに鳥何れ見射く遠入る
秋の去るえうや啼か去る
けり啼やま種出ぬ麦熟
深山路や何と啼く呼子鳥

入楚 茂秋 北枝 木高 ^{紀伊} 蒼峨 之角 朱拙 万子 已辭 ^{陸奥} 万流

雲の霞何や〜のうら子そ
 毛々三第たつ〜のしもをそ
 彼の忌ちうそや磯のさ〜貝
 ちうころやゆ石の網のむさう
 櫻網笑つ〜事〜ようし〜魚〜
 一羽り櫻く〜力と嘆せりら
 表の水は秋の木か〜と柳籠
 ぬま〜も表の表の葉垂〜乳
 おそれある急の競ひわらう梁
 雨美〜た〜ち〜は〜く小館ら
 三子風
 西鶴
 休夜
 素書
 琴風
 兼吹
 嵐雪
 翠樹
 吉寄
 圃水

蛸の子れんすはま〜は雀の喜
 有蛸多粘の〜は角りた〜故〜
 儀壺り今亦〜む小粘〜乳
 古敷急や〜もに汲〜く小あや
 く〜粘や枚りひ〜と入日敷
 有亭立〜もに走〜り埴の名蛸
 埴塞の〜を乃き〜埴や表
 埴我あ〜く埴あ〜へてや埴の表
 埴塞や〜の〜下表節埴
 蛸古敷〜入〜古代の〜
 古芳
 才登
 為有
 東伴
 馬仙
 楓林
 万子
 圃入
 意程
 曾良

蛸子

埴塞

汲粘

桑摘

若布

汝をやらす中を既とつる蚕より
瘠て起る喰ててこそ桑葉子
下筋の造りてこく露の那
青くきく蚕飼の家結多海くら
三月や冬の桑色の桑一本
桑はもや畑のまゝとても
桑つゝや枝より夕日のあつて
糸糸布儀を法を名砂まて
乙作のえつゝ和布成百よひ
一雨冬和布より悪む日如る

若布 味雨
若布 青雨
若布 露也
若布 文章
若布 子川
若布 疎長
若布 翠也
若布 涼菴
若布 一帯
若布 春草

桃 浮世初

うねりやさしと遠くせ所
起つくと白くも界の志
餅喰ぬ旅人おがしと花
忘れや糸と居て水衣と
麻の種毎年ゆする桃の志
淋さけくつりよ出さや桃の花
大冬遊て糸よ人界の志
日守路と思ふて事や桃の志
垣杭りいさき桃の志
桃さくや畑の机乃梳さく先

浮世初 少波
浮世初 木固
浮世初 文考
浮世初 桃際
浮世初 利牛
浮世初 涼菴
浮世初 荒弾
浮世初 飛坡
浮世初 若本
浮世初 乙中

花

かろし家や松の権りつゝ木、
鶯の居たり教りし桃の志
大空の上まき、赤い松乃花
雪の居たりゆかりのむ
花の居けりし松の林の那
一僕とほりくありし松乃花
花ちりし松の居たりし松
志あ架て大のそりし松乃花
花の居たりし松の居たりし松
咲の居たりし松の居たりし松

春北
春波
十磨
文意
信徳
季吟
重軌
常矩
我雲
兔積

春五十二

花の居たりし松の居たりし松
新清も花の居たりし松
花の居たりし松の居たりし松
花の居たりし松の居たりし松
花の居たりし松の居たりし松
花の居たりし松の居たりし松
花の居たりし松の居たりし松
花の居たりし松の居たりし松
花の居たりし松の居たりし松
花の居たりし松の居たりし松

芭蕉
那坡
涼菖
太来
丈草
木意
野水

花に死かろく来てあけ酒の泡
 我をのよももあつはふ盡
 羽風をこふとあまれ村うら
 花の音やあまらひらひら
 春草の揺さくはるむらびんが
 雪のふるあまのまらや花のあ
 ふの雨小社井くして帰るや
 あつくのはるあまらひら花あ
 花さくら大後中りあつら
 む残るくあまらひら花あ

嵐雲
 智月
 三秀
 許六
 半残
 氷花
 史邦
 秋風
 青垂

かろく来てあけ酒の泡
 一本城くまらくはるむらびんが
 ちるあまらひら花のあ
 夏草の揺さくはるむらびんが
 花の音やあまらひらひら
 夜とゆきふのへらなや外
 花の雲をこふとあまれ村うら
 松風をこふとあまらひら
 乞食とあまらひら花の法

怪蛇
 浪化
 暮四
 了ん
 友尚
 雨青
 映山
 丹七
 巴風
 老仲

梅

日法うらやひさく見ゆふの山
花ち如きの木陰にあゆむ向
ひさおて人中丸せん山さく
木のそハけも能も信くくは
ひさぬをく日暮の山梅
起らにさぬ能多あけくや梅
明堂や梅さく先ぬ山さく
益来りともひくの梅はれ
そく山さく此一を梅り
各の分ぬにかけし山さく

素丸
荷翠
一鉄
芭蕉
末山
心直
全角
去芳
晚山
湖春

春五十五

高き今より一枝ありんち梅
梅さくや如き牛衣白ひさく
昔何ゆや枝傘はく山さく
さく教く人ゆき山梅
死後の園守ありん山さく
我嘆く梅一歌く巻戸梅
一枝ありあき山梅
伐口或人の井起や山出ら
山さく死象後子之戸梅
らん物と笑ひ山さく梅

文字
洒也
不卜
一有
北枝
支考
尚云
徐寅
弥子
乙中

遅梅

月影うさの道はゆき山さくら
やま梅何は雪のうさ竟那
まゆへん人の脊戸入や万梅
まゆへん人の脊戸入や万梅
まゆへん人の脊戸入や万梅
まゆへん人の脊戸入や万梅
まゆへん人の脊戸入や万梅
まゆへん人の脊戸入や万梅
まゆへん人の脊戸入や万梅
まゆへん人の脊戸入や万梅

雪山 老士 希因 麻又 冷苑 雪舟 朝宗 伊勢 紫雲 琴仙 宗中

春五十五

梨花

とそりしめて道はよつあき梅
若木にも一思葉あり道はく
志れりな妻りゆら梨の花
るの身まゆへんさ梨の花
梨の花さくや馬白とうま散
梅夜のゆく梅はりそ梨の色
曲ら川枝出しくや梨の色
かへしや咲くち散ま一眠
梅葉やま志刺子の顔は色
梅葉のゆく夜たぐり眠り

五筑 志 九夕 許六 友考 吾仲 以友 篠愛 重頼 希因 普宗

海棠

幸夷 躑躅

海棠や高様うらも春の
 加いこや不粉ふ粉もとのり
 死なくて崩るるるの
 凡そも久き幸夷のむ
 笑立く来のあやや躑躅山
 初うら女松生さつ
 去馬の焼野あや躑躅
 山名やほじりけい尾の
 山まゆに花咲うらつ
 日の園と越るる春の躑躅

遠平
 枕山
 巴水
 羽長
 文章
 尚白
 雛休
 株丸
 荷弓
 希因
 春夷夫

山次

香久山は伊達をたふつ川
 山名や宇治の嬉ゆの
 山名や宇治の嬉ゆの
 春のあきや又春のあき
 山次やあにひるも
 山名やたうえく春の
 やりあや薬換は
 山名や春の春の
 春のあきや又春のあき
 山次や薬換は

色蕉
 園指
 白雲
 憶哉
 半残
 向空
 巴人
 枕化
 希因

木瓜花
沉下花
木蓮花
赤南天
仙臺萩
庭檜

山姥木は何なり咲く春のつ
山吹花も数なりつと白萩
砂川やまよしとけり木瓜の花
物老の庭で咲く如は赤花
社垣もとちや庭の沉下萩
木蓮花紙かほ哉咲りりり
米蓮花もあめさるる表もれ
仙臺萩大空人あいつに
言はれぬ人をもとて庭をくら

玉筑
可持
猿稚
若文
室賢
子那
尚白
踏山
徳九

春五十七

あぢのむ
菫防の花
杏の花
李の花
小糸花
桜の花
連翹
馬酔木花

織女も侍とく花さくま
杏の花も何々杏の花の色
かきものふやくまのーかま
李さくあや風をさくま
外物も風をさくま
名も持てる桜も咲く
連翹や杏、枝り山吹と
ま、翹や柳、つたふたふた
約もも子調ひんおのせく花

希因
貞位
若西
琴路
不龍
山夕
湖春
若由
若妍

合法
柿の花

山里や旅のあはれ合法の
喰ふ時多し何れも今更柿の花
枝のふらふらと人よりあはれ
人より求む人老す外柿の葉

信西
伯光
助實
文春

忍ひぬ

接草

九輪草

飯

吹流よももけりさくら草
忍びり接草の葉も九輪草
九輪草一ア人あはれあはれ
草外も若くは老くもあはれ
笠の端れも若くは老くもあはれ

春
素東
星桂
色蕉
探志

春
春
春

風吹くく静るるる夏の花
穀畔や種まきもさく藤の花
くんあつよ一培をもわぬ花
葡萄よりあはれも夏の花
藤の花風よふも吹散る花
毛もらや地すもや松も夏の花
葉のふらふらと下も藤の花
夏の花もさくく穀のあはれ
はどく草にけりや夏の花
白藤や死す吹くもこの川

放風
荆口
白雲
伊勢
栄友
雨村
謹考
雲森
巴静
巴人

莖

柳の莖はかきとく夏の花
何んはけのぬま去年の莖より
山踏来て何やういふもいふ
旅子の尾のやうに侍る莖より
亀裂のふたに志存すみれぬ
古き世はれぬに涙の莖より
こゝろは無限の志は莖のぬ
種はせくぬくぬく芽ふぶ
成りぬまをきてや芽花の種
群ぬりの泥より出く莖蘇州

莖花

五穀花

右之 秋後
忠切
芭蕉
秋色
その 女
一羽 上野女
椿子 紅
老竹
日向 葵木
春五十九

枸杞

巴加木

桑摘

けしき衣を起まふ又加木
花をえんひてこゝろふつ
胸をさかきぬらわす桑摘
夏かしの影木はふと葉は
姑中風をそく起すもぬ
葉一と葉散り嬉ばの日か
旅人の一葉うさけ葉花
木くぬぬぬぬぬぬぬぬ
手は先を捨ぬぬぬぬぬ

秋水 紅
古芳 赤
何処
氷花
老士 草
京吹
春雨
文下
他若

手は先

桑捲

春菊

金錢花

水滸き花

桑植

松の戸裁りうけけりく葉より

春菊や根をきくは出づ

想成り花をきくは出づ

たりの花をきくは出づ

二月の月夜に桂ん葉の系

葉苗より衣係りり去るの茎

桂のゆきくや二日のゆひ

女房ふりゆきくや二日のゆひ

ゆきくや二日のゆひ

嵐井

布子

松路

生林

南山

朋水

氷園

氷園

曾北

春六十

三系芥

蕪髮

丁子芥

青麦

席杖や阿波の内伝るありのみ

青蕪髪は花をきくは出づ

二葉より白ひきくは出づ

幼ひり花をきくは出づ

系花と花をきくは出づ

蝶くは花をきくは出づ

系花と花をきくは出づ

菜種より花をきくは出づ

青麦や花をきくは出づ

麦をきくは出づ

東阿

杜若

仙化

寸馬

仙化

丹七

丹七

吾茶

三月大根

三月菜

金風花

とふ子草

狗脊

芙蓉

若荷竹

春山

大根花の三月とて

あまのさへ三つ大根花も

あまのさへ三つ大根花も

北

北銀

可

可堂

鬼

鬼録

狗脊の強帽子なく日知れ

芙蓉や籠の俵の万と

若荷竹何り肥とそ若荷竹

若荷竹の挿根り数やわら

若荷竹の挿根り数やわら

正秀

伊賀 文泉

村江

芙蓉

文秀

春六十一

春野

春の暮

男が一夜寝てとん春の山

男子かゝる汝ありくや春の山

碓氷道あはれ春の野と

女さへ一そ肩なく春の野

木瓜あさし寝てとん春の山

春のやいし春の山にかつ

春のやいし春の山にかつ

秋のやいし春の山にかつ

秋のやいし春の山にかつ

花さへ一そ肩なく春の野

近江

有境

伊賀

許六

北

山居

北

山居

北

山居

北

山居

春

春のあけのけしき
春のあけのけしき
春のあけのけしき
春のあけのけしき
春のあけのけしき
春のあけのけしき
春のあけのけしき
春のあけのけしき
春のあけのけしき
春のあけのけしき

芭蕉
文彦
山川
松妖
文彦
柳水
李南
林友
愚心
定孝

三月 春

三月の春
三月の春
三月の春
三月の春
三月の春
三月の春
三月の春
三月の春
三月の春
三月の春

宗瑞
也存
文圃
山亭
松葉
笑山
松風

三月と文子書のと名張る乳
春もまふ糸のかさうやれ巾

玄東
以之

春六生春

